



縁

江田島健児

姪っ子の一美が、アメリカに遊びに行きます、と高校を卒業した一年後にやって来た年だから、一九九七年の終わり頃だった。アメリカ・テキサス州・アーリントン市で鉄板焼レストランを経営していたボクは、直に英語とアメリカを一美自身の体で感じてもらうため、毎日レストランへ引っ張りだした。ランチのないのんびりとした日曜日の午前中、店に行く前に自分たちの昼食を作る材料を仕入れにオリエンタル食材の豊富なチャイニーズ・スーパーマーケットへ立ち寄った。

ボクと一美が連れ添ってスーパーマーケットへ向って歩いて行くと、入り口で一人の日本人らしき老婦人と出会った。昨夜店へ食事に見えたばかりの日本人らしき七十才前後のその老婦人に日本語で

「お早うございます」

挨拶をすると、

「あー。ヒバチのオーナーさん」

やはり、彼女は日本人だった。

「はい、そうです。昨夜は、どうも有り難うございました」

横に立っている姪っ子を

「日本からきたばかりの姪っ子の一美です」

紹介すると、

「あ、あー。そうだったんですか。今度、また行きますからね」

幾度か店で顔を見たことがあっても、会話を交わしたことの無い異国に住む日本人女性に、初めて日本人として普通に親しみと尊敬の念を込めて挨拶できたことが清々しかった。

その夜。仕事を終えてアパートへ帰りドアを開け、自分の部屋に入る一美の後を自分も自分の寝室へ歩きながら、カウチに座った女房が見ているテレビに目をやると、日本のビデオが流れ、

「ここはテキサス州・アーリントン市です。・・・・・・・・・・」

テレビからリポーターの声が聞こえてきた。え、えっー、何をやっているのだろう。日本のテレビでは殆んど出てくることのないほど日本人に知られていない、自分が住んでいるアメリカ・テキサス州アーリントン市。興味をそそられて、女房が見ている日本のビデオ観賞にボクも参加した。

「ここがTさんが住む市です。・・・・・・・・」

上空から撮影したアーリントン市を見ながらリポーターが喋っていくうちに、Tさんと呼ばれた人の顔が画面に映しだされた。

「え、えっー。まさか・・」

今朝、一美と一緒にチャイニーズ・スーパーマーケットで挨拶を交わしたあの日本人の老婦人の顔だった。

“遠い日の約束～ヨシアキはベトナムで死んだ”という日本テレビの終戦五十周年企画番組だった。ボクの目はビデオに釘付けになる。間もなく、ダラスに住んでいた時にやはり女房がダラスの

日本食料品店から借りてきた日本のあるビデオで見たテレビ番組を思い出した。タイトルは“子供たちは七つの海を越えた～サンダースホーム・・・”と、かなりはっきりと記憶していた。三菱財閥の令嬢：澤田美喜による、終戦当時、日本人女性と米軍兵士との間に生まれた引き取り手のない戦争孤児を世話するエリザベス・サンダースホームを築立ち、世界へ羽ばたいていった孤児たちの人生を描いたドキュメンタリー・ド

ラマだった。これも日本テレビ開局二十五周年記念特別番組であった。

アメリカで自分の店を作る夢に向ってひたすらに仕事に打ち込み、滅多にテレビを見ないボクがたまたま見た日本のビデオが、今朝会ったTさんの息子、そしてTさんの実話だったとは、信じ難いことであった。Tさんの息子：ヨシアキ君の誕生は悲しい出来事から始まっていた。

しかし、息子ヨシアキ君の人生は悲しいけど悲しさや悲愴感を感じさせなかった。いや、アメリカに渡り高校生の時は、野球にフット・ボールに周囲が驚くほどの才能を発揮して一躍学校のヒーローとなり有名人となる。

大学に進学してからもヨシアキ君の活躍は凄まじく、メジャー・リーグのシンシナチ・レッズからも誘いがくるほどであった。しかし、ヨシアキ君は軍隊を志願してアメリカ陸軍へ入隊する。やがて、ベトナムへ派遣されてベトナムの地で息子ヨシアキ君は銃弾に倒れる。

何という人生を背負った人なのだろう。ビデオを見終わった時に抱いたボクの素直な感想だった。その人が、ボクの目の前にいるのである。不思議でならなかった。

Tさんはそれから三ヶ月に一回か四ヶ月に一回の割合で店にやってきた。もう、ボクはTさんの人生を知っている。しかし、その悲しい人生を口にしたり話題にする勇気も気持ちもなかった。ただ、紆余曲折を経て異国で元気に生きているTさんを一人の日本人として敬うだけである。

Tさんが店に見えると、ボクは必ずテーブルへ挨拶に行った。

「お元気ですか。その後お変わりありませんか」

すると、今までとは打って変わったような親しみを感じる会話ができるようになった。長年連れ添っている旦那のDさんとも打ち解けるようになった。

アーリントン市で一番最初にビデオ・レンタル店を始めたことや、ボクが一九九三年に“ヒバチ93”をオープンした頃から店に来ていることも。旦那Dさんの仕事でサウジアラビアに行ったことも。そしてある時、Tさんは大福もちやおはぎを作って店に持ってきてボクを驚かせた。

こうしてTさんと会話するようになってから、十五年以上が過ぎている。TさんにはDさんとの間に日本人の顔をしたアメリカ人の奥さんを持つ息子がいる。その息子もTさん同様にボクの店を鼻根にしてくれたが、昨年十月、景気の悪さ、ロケーションの不利、その他にも決定的な要因を抱え、店を閉めてしまった。

店を閉める一ヶ月前に来店したTさん一家に、ボクは閉店予定のことを云えなかった。それを伝えるにはあまりにも問題が複雑で、又だれかが引き続き開店するかもしれない状況にあり、従業員も客も混乱に導くようなことができなかったからである。

ボクは

「私も最近体が弱くなってね・・・」

と八十歳を過ぎたTさんの言葉を思い出しながら、心からTさんの健康を祈っている。